



May. | 2023
 沖縄開教本部通信
 vol. 105



ハイサイ 沖縄

※「ハイサイ」…沖縄の言葉で「こんにちは」のこと



琉球王国では島津侵攻の後、一六五九年に一向宗の禁制令が出され、浄土真宗が禁教となってる。そのため真宗寺院の建立はなかったものの、薩摩の隠れ念仏者との交流を通して本願念仏の教えが琉球の人々に伝播していた。ところが一八五四年、その密かに活動していた「講」に集う人々が一斉に取り締まられる法難事件が勃発する。この事件の報を受けて、同行の中には、仏像や経典を焼き捨て難を逃れた者もあったが、花城康梅という人は苦悶の結果、橋の上から海に投身自殺している。またこの講の中心人物で、王府の高官であった仲尾次政隆は石垣島に無期流罪となる。政隆は息子から捕縛される前に「こうなってはおしまいです。早く信仰を捨ててください」と迫られたが、「信仰だけは捨てることができな」として流罪を受けたと伝えられている。（『浄土真宗沖縄開教前史』伊波

普猷より）

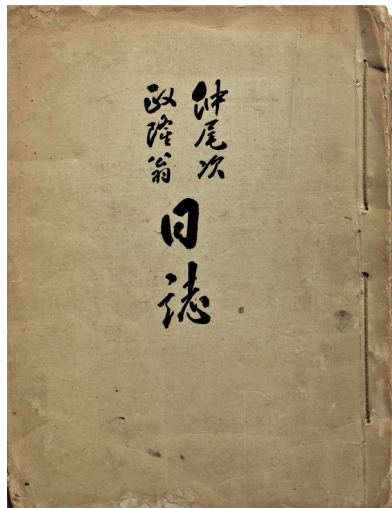
その政隆が配流となつていて間に記された日記である『配流日記』は以前からよく知られていたが、その所在は不明であった。この度その原本を所蔵されている政隆の末裔で東京在住の仲尾次政剛氏とお会いし、日記を拝見するという勝縁をいただいた。この日記は沖縄戦の戦火を逃れた数少ない真宗法難の事件に関連する史料の一つである。政剛氏によれば、戦争で避難する際に、これだけとはいうことで持ち出された物の一つとのこと。なおこの調査は大谷大学の福島栄寿教授を代表とした研究の一環で、いずれ詳しく報告されるので、その際にまた本誌でも取り上げたいと思う。（「九州沖縄仏教史・真宗史に関する研究」(JSPS科研費22K00085)）

ところで今回の調査に加わった筆者と政剛氏との間に思いもよらないご縁があることが分かった。政剛氏が戦中疎開したのが滋賀県長浜市で、筆者と同じ高校出身であったということである。また彼の父は当時長浜病院の小児科医であったが、戦後すぐに病気で長浜の地で亡くなっている。仏壇を拝

見させていただけると、法名が記されており、同地域のいずれかの真宗寺院で葬儀が執り行われたのだろうと推測される。実に奇遇な出来事であり、正剛氏も大変喜ばれ、話題も尽きなかった。

琉球真宗史の遠い時代の歴史調査が、現在を生きる者の新たな出会いとなり、本願念仏を確かめる機会となつていく。「遠く宿縁を慶ぶべき」ことである。

別院輪番 長谷暢



『配流日記』表紙(右)と原文(左)

ハイサイ沖縄

「カンヒザクラ」

二〇二三年三月十四日、東京で桜の開花宣言が出た。日本列島を北上し、毎年のように春を彩る桜だが、沖縄にも「桜」があるのをご存じだろうか。沖縄の桜は「寒緋桜（カンヒザクラ）」と呼ばれ（名他多数）、ソメイヨシノの白い花びらでなく、ピンク色でやや下向きの花を咲

かせる。開花時期も一月後半から咲き始め、サクラ前線は本島北部から南下してくる。今年は平年より早く、一月三十日、那覇市で満開の花を咲かせた。そして三月には花も散り、葉桜になって小さくかわいらしい実をつける。県内各地で祭りも開催され、「那覇美ら桜まつり」や「名護桜まつり」が有名だ。感染症対



カンヒザクラ

策などの観点から、開催を見合わせているところもあるが、これから、冬の沖縄に桜を見に来るといふ観光もいいかもしれない。

「沖縄研修」

感染症法上の分類や、マスクの着脱において、全国的にコロナウイルスに対する対応が緩和される中、各教区の沖縄での平和研修も変容してきている。コロナ以前、様々な「沖縄研修」という形で全国から来られていた御同朋が、コロナ中はピタリと止まっていた。しかし、今年に入って立て

続けに、北海道、能登、高岡と、教区委員会等で研修会にいられた。またこれから名古屋や九州各地からの予定もある。コロナで広まった「リモート会議」で事前研修を開催するところもあり、ありがたいことだ。今年も開催できなかった「非戦平和研修会」は、来年四月の開催を目指している。どこであつても、現地へ赴き、その場を体験

することは大きな意味があるのではないだろうか。また、沖縄からも全国へ赴きたい。



辺野古で座り込みを応援する研修会参加者



沖縄便り

ゆんじや
漢子

沖縄に移り住んで19年。

友人たちが私に聞きます。「何故沖縄に行ってしまうの？美しい島だから？」と。中には「新基地反対闘争の為ですか？」と聞く友人もいました。今も聞かれ「美しい沖縄の観光用のキャッチフレーズに誘われた訳でも無く、闘う為でも無い。一緒に生きようと呼んでくれたご縁です」と答えています。

私が暮らしている読谷村には自然が作りだしたガマ（洞窟）があります。そこは犠牲になった肉親のお墓です。決しておやみに入る事は許されない場所です。沖縄の村々を巡ると戦争の傷跡が無い村は無い、とつくづく思い考えさせられます。

それでも生き残った人々は死者を弔い生きて私に語ってくれた。「戦争の時代だったからね」の一言は思いの全てが込められていた言葉だった、と思います。戦争になったらもう誰も止められない。

宜野湾市に「東本願寺沖縄別院」の標識が掲げられている近くに空き地があります。小さな子たちが、遊んでいる無垢なる声が聞こえてくる場所です。

子たちの明るい笑い声は人類の希望のように私に届きます。その声が未来へ続くように祈ります。

早朝5時ルールを破りアメリカ軍機が空を飛ぶ読谷村にて。